

2/28 マタイの福音書 12 章 1-14 節「人の子は安息日の主です」

小池 宏明 牧師

*ユダヤ人指導者たちと主イエス様の律法観の違い

ユダヤ人指導者（パリサイ人、律法学者）たちは、十戒の4番目「安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ」に続く「いかなる仕事もしてはならない」（出エジプト記 20 章）という言葉に重きを置いた。仕事の中身を事細かく決めて、しかも自分たちが守りやすいように決めて、自分たちが律法に忠実な者であると優越感に浸り、民衆を見下して、支配する側に安住していたのである。ここには、主なる神様に対する恐れがない。彼らは、神様のように、人々をさばく者になる。そして人々を区別して、差別して、対立が起きることになる。

しかし、イエス様は、安息日の一日を特別に取り分けて、父なる神様から豊かな祝福を受けるために、生業（なりわい）としての働きをすべて休んで、主なる神様のみには仕えるためにこの日を用いなさい、と勧めている。私たちには、新約の安息日である「主の日」（日曜日）に、身も心も安らぎを得て、主なる神様から祝福を頂くのである。

*安息日の主とは

安息日は、何が働くことになるのか厳密なルール作りを問題にするのではなく、安息日の主人である主イエス・キリストに対して、真実な愛を持って、忠実な信仰で仕えるかどうか、の問題である。8節「人の子は安息日の主です。」から。そもそも、主なる神様が、安息日を制定された。そして主イエス・キリストこそ、安息日律法を正しく解釈することができ、安息日におささげする礼拝の対象なのだ。主イエス・キリストが安息日の中心なのである。

私たちは、安息日と聞くと、すぐに、「聖日厳守」というスローガンを掲げて、人々をさばきやすいのだが、義務的意識ではなく「主の日」を喜びの一日としておささげするように目指したい。

ある人は、日々の仕事、勉学、家事、人間関係などに疲れ切って、へとへとになって、「主日」（新約の安息日）を迎えるかもしれない。また、ある人は礼拝に出席して、その他の奉仕でさらにへとへとになってしまうかもしれない。しかし、体や心の疲れがあっても、それを引き摺ったままだとしても、主が招いて下さった礼拝を共におささげし、「安息日の主」の癒やしに期待して、主イエス様から新しい一週間を新しく歩み出すことのできる力を頂きたいのだ。「主の日」が、喜びと感謝と安息となるように願いつつ、今日も、明日も、毎日、主の御前に出て、主の祝福を受ける歩みでありたい。